

伝統を曲げてでも残したい慣例
熱い思いが創り上げた金色の競演

金田・神崎山笠競演会

そこに「思い」があるならば

山笠存続の危機 絶やさないための選択

電飾輝く華麗な山笠が集結する「金田・神崎山笠競演会」。2週間の祭りを締めくくるとこの催しにも、伝統をつなぐための決断と関係者の熱い思いが込められていました。昔から神幸祭を終えた金田各地区は、山笠を激しく上下させながら回転する「練り回し」を競う



ことが慣例でした。その格好の会場が平成筑豊鉄道金田駅前前の広場。しかし「駅前」と呼ばれたその会場で、若いエネルギーがぶつかり合う競演は負傷者も多く、

く、広場が公道に整備された後は警察との衝突も絶えませんでした。そして昭和61年、その悲劇は起きてしまいます。駅前を立て続けに起きた死亡事故。そこから一度山笠建立は途絶え、数年後に再興した後も隔年の建立となるなど、祭りの火は消えつつありました。

各地区の代表者たちは、事故の原因は明確なルールと適した競演の場が無いことと考え、計画的な競演の実施を提案します。



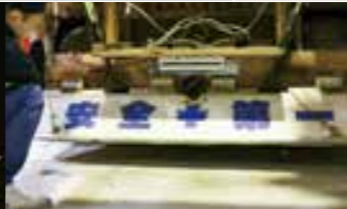
しかし、一度御旅所に奉納した山笠は夜12時までの待機が伝統。2日間の競演には反対もありました。相談を受けた阿部宮司は「奉納した山笠を集めて見せ物にするのは正しい神幸祭ではないとの批判もあった。しかしその根底には祭りを絶やしたくないという熱意がある。その思いがあるならば、新しい挑戦を見守りたいと思えました」と振り返ります。その後も関係者の説得を続け、平成10年、ついに初の山笠競演が実現したのです。

積み重ねて新たな伝統へ 現代の「駅前」の誕生

4年目には町からの支援も決定し、競演会は公式にイベントとしてのスタートを切りました。神崎地区の山笠の参加も積極的に受け入れ、進化を続けて17回。今では町の欠かせない観光資源の一つにもなっています。そして自主開催の3年を含め20年目の競演となった今年、電飾山笠全10基が同じ時間・同じ会場に初めて集結。イベント発足時から尽力してきた池田昇事務局長は「この光景をずっと思い描いていた。行事も30年続けば伝統と言われる。このイベントを新たな伝統にしたい」と目を

細めました。

開催前には各地区代表と組織的に安全管理の徹底を協議し、事故から30年以上死者を出すこと無く、今日を迎える山笠競演会。祭りへの愛が創り上げた「練り回し」の会場は、今の若者たちにとって年に一度、思いをぶつけることができる現代の「駅前」であり続けています。



↑過去の事故を教訓に、今では多くの山笠の下部には巻き込み防止の板が取り付けられている。

電飾輝く華麗な山笠が集結する「金田・神崎山笠競演会」。2週間の祭りを締めくくるとこの催しにも、伝統をつなぐための決断と関係者の熱い思いが込められていました。昔から神幸祭を終えた金田各地区は、山笠を激しく上下させながら回転する「練り回し」を競う



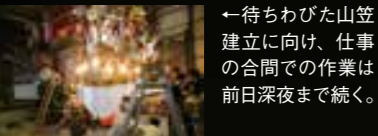
↑競演会の熱気がまだ冷めない中、各地区代表の実行委員は会場の片付けにあたった。

憧れを形にした山笠

南陽会(神崎)
有藤 義行 会長



子どもの頃、山笠の無い私たちの地区はいつも祭りに憧れを抱いていました。太陽と南木地区が合同で南陽会を発足し、手探りで12年。2年に1度の参加ですが、その分強い思いが私たちにはあります。競演会があるからこそできたこの山笠を守り続けます。



←待ちわびた山笠建立に向け、仕事の合間での作業は前日深夜まで続く。

